

先進
繡像

玉石雜誌

前篇

五

和書門			
三	六	七	一三
一	四	二	三
冊	架	函	號類

內閣文庫		
一	三	和
五	六	書
八	七	
函	一	
一	〇	
二	三	
架	冊	號類



地

內閣文庫	
番號	和 36713
冊數	10(3)
函號	158 212



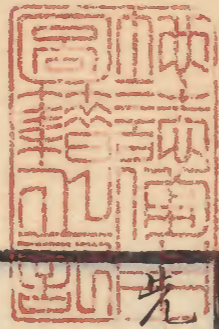
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





先進繡像玉石雜誌卷第五

名和伯耆守源長年肖像并傳

舟上公名和湊 元亨二年乃升 衛門府

左右京圖 當直門 國司守護職乃差別

行幸路程 兵庫藥師寺 真跡文書 京の宅

二本一草乃と 大内裏諸門鴉尾

兼好法師壽像并傳

神風和記 冷泉万里小駱敘 常盤井敘

中宮乃小辨 堀川大相國 延政門院一糸

鎌倉比企谷兼好住居地 鯉魚 平貞並

大佛 大覺寺御移徒 道我僧正



名和伯耆守源長年肖像

名和某藏

山門靈山院
 本曾然兼好菴室の地
 本过長泉寺兼好家
 兼好塔銘
 見好法師
 真跡和歌
 江天全乃歌

名和伯耆守源朝臣長年ハ伯耆國會美郡名和莊地頭小
そと之兒ハ又左郎長高と云遠く先祖を尋ね是ハ村上天
皇乃皇子中務卿具年親王より十五代乃孫ありて近き由縁を
きく承久三年後鳥羽院乃北条義時を追討あるへ
とく國々乃勇士をめさせ授け分ける宇治掃部向く軍
あり所領を義時奪ちて名和行季秋之孫ありて同
き幼高の嫡子あり長年之孫ひらく家富たふのそあり以て
馬乃道之健うりく是ハ國中了敵を無かる人あり無日
元弘二年二月七日後醍醐天皇華洛を御出ありて四月二日
隱岐島へ遷幸ありて知夫郡國分寺乃御所におこりよ
都より乾の方あり杉程伯耆國名和湊より五十九里餘名和湊より
隱岐島より二十里ありちこり合せく八十九里許ありるへきなり

隱岐島乃守護職佐々木隱岐判官清高佐々木源之義義
の五男五郎義清
二代の孫了隱岐
於瀛清乃嫡子
村上の輩より催り集め皇居を守護しをりける天皇
慮慮深くおりして守護乃武士小或時ハ所置を給る
ある時々恩詞をいけらるる程ハ此ハ從ハ廉く無
出來おけるかき聖運同の故へきあるなりけり長年
乃弟小名和少氏と云ものあり皇居の守護ありたり
けるを天皇親しく召かけしハ行氏たりしハ心愛
て召ありける長年を諱りしハ神御子系人なりしハ伯
耆國へ引返る去りけり行氏隱岐島へ後より順承を給
けり内り天皇ひそく國分寺の御所を御所ありて

おめさき元弘二年閏二月廿七日和湊へ備寄らば千
種頭中将忠顯朝臣を勅使し長年々武勇の移り上同
達を同速し御迎ひ系上京都へ還幸乃計畧を施し
四海一統乃皇化を致しなるんを中を馮々仰らるる旨を
述らるる長年をふ一旅を集り酒宴しく居たりける
此由を承らるる頭を傾け兎角の言申得さうける處に
弟小太郎左衛門長重とて出くすけふ古より今に至る
弓矢取乃望みり各と理乃二りをとぐ我等泰らくも
十善乃存る憑れ奉る此大事を馳走したとて尸を軍門
お曝とも其名を万代り傳えんと生前乃思出死後の名
譽たさうた一助らるる定めたる御迎ひ系上へ

持計らひけり列座の一族二十餘人しか此儀了同しけり
長年ハ長重と若し湊へ御迎ひ系上へ自余の方ハ船上
へ取上り合戦乃用意あると云々鎧を穿る肩小
あけつ御迎ひ系上けりとも俄乃こころ御乗あんと
備も無里けりハ長重着る鎧の上り荒原を巻く最を
負進せ飛り如くお船の上の山坊へ入御ありなる
船の上ハ御番
系上御出御能義郡八枚お行程
長年迎邊の在家へ人を
走らせ候了思立とありと船上へ根米をよるなり我食
あふとける米穀を一荷持運ひたりんものハ鳥目五回つ
とらとへりと觸たりけるハ十方より人夫數千人おまきし
芳りと持送る程ふ一日の間り根米ハ余石を運ひたり



あゝ、其
 うへへ
 とり
 名和
 後醍醐天皇
 名和長年
 賜
 秋

出雲八枝

名和

伯耆米子

信光園



出雲
 乃地方
 名和
 乃地圖
 志
 乃

德岐島

出雲松江

此頃乃量ハ南都興福寺東金堂元亨二年乃升今京升
八合六勺三撮を容と大倅同かかるハ々々ハ五千餘石ハ今
乃四千二百十ハ不餘よ了あくる口斗を俵たいとと一萬七百
八十七俵余たり二俵を一荷とくハハハ九十三荷余たり
新しんの龍りゆう城じやう乃兵百五十騎とソハふより人敷を計か
了九七百五十人一騎五人とこの頃ハ積れり七
百八十人あく口千二百十ハ不餘を食人ひと一ハ百五十餘日
を支ふさぬハ長年ちやうねんとつうふ名和莊乃地頭ぢぢうたり其富そのとみかくの
如ごとく
残のこる金銀財寶きんぎんさいほうを人夫ひと百姓等ひやくしやうたう不ふち與あへその後のち己のれハ館たち子
火ひを掛かく百五十騎乃兵へいを卒そつ一か船ふね上のうへ了馳ち登のぼり皇居みやまを守まも

護まもかりする長年ちやうねんハ一族同苗いちしやくどうぼう七郎しちぢやうと云いふ老智勇らうぢゆうたくおりとそのあ
お里お乃の色いろハ白布しろふ五百端ごひやくたんありけるを旗はたとを松まつ乃葉のを焼たく
烟けむり了薰かく近國きんごく諸しよ武ぶ士し乃家のくの文ぶんを書かてけ乃本のの本彼か乃
峯ね不ふそ立置たけるけ旗はた悉しつく峯ね乃嵐あ吹か翻か大勢おほせ乃ハ中ちゆうハ
馳ち集あつ里りたふと覺おぼえかくか夥おほく見みへたりける去程さしやう乃同月どうげつ廿九日
仇あ木き隱岐いんぎ判官はんくわん清高せいかうおかくく彈正だんせい左衛門ざゑもん尉ゑう同仇どうぢゆう渡前わたりまへ司しの外
塩治しんぢ判官はんくわん高貞かうてい富士ふじ名判官なはんくわん義綱ぎかう等をら出雲いづも伯耆はくしよ
周防すおう不見ふけんにケ園けい乃禁いんを催もよほしく之の子こ餘あま珍めづみく船ふね上のうへ乃
南北なんぼくよりを押寄おしよける此この船ふね乃上のうへとりハ此この冬ふゆ大おほハハ續つづきて
巖いわたりく崎さきちの方かたまで嶮あやみく地僻ぢへき里りあり俄い拵ぢゆうたハ城ぢやう
おまはハいまく堀ほり乃一處ひとこゝハ堀ほりらハ屏へい乃一ひとまハ塗ぬをくた

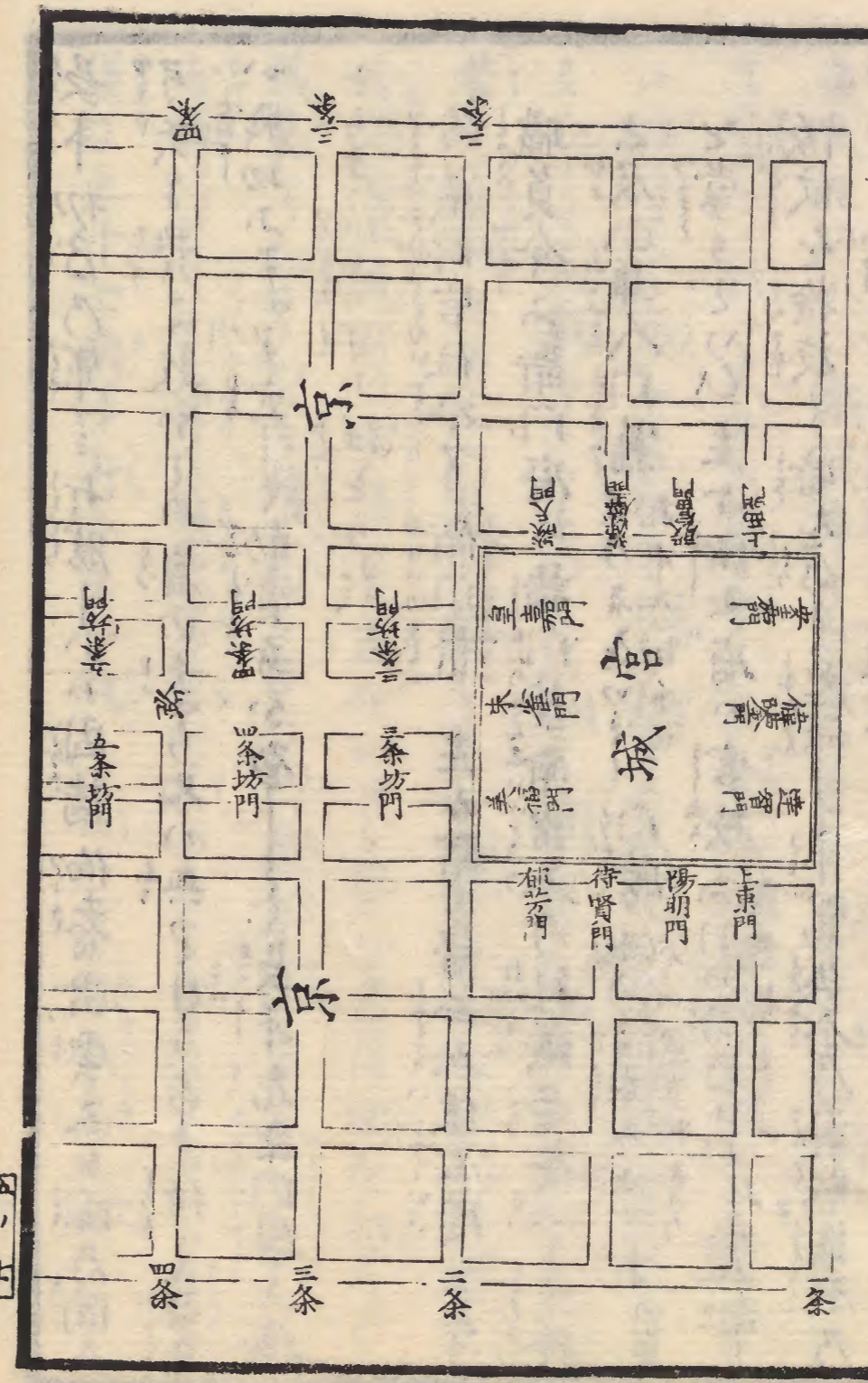
進め散らさず計りて先據の端のゆるく知をゆるくや賢く
と長年を始め金身小長身九傳尉長重おありく小長身
長成その外一類後卒ふか抜つてく率をとり鋒をさるへ
て責む後ハ大手乃寄手又百余人谷底へ暮おとされ衆
不挫して頭をくたさ己り持て取大刀を喉を貫ぬり色
く死する者數をうらとひりおれ清高の後陣を備えく入
替り合戦を由志川急く頼むく憑る塩原富士衣朝公
令持黨元より官軍の志をいよと勢がなさは関をゆるく
清高の切くつる清高の手の志周章色めき一支由志川
本國より引退く塩原富士衣朝公より責めけりハ清高
僅に之十七騎よりおされ船より去り隠岐島へゆりける

長年初乃軍を打勝りハ因幡伯耆出雲之ヶ國乃同ハ
弓矢子推しおれり者のおらぬハ無りけりおと併り長年
ハ戦功より定りく勲賞をさるく長年九衛門尉を補
とらふ伯耆守を任とらけ

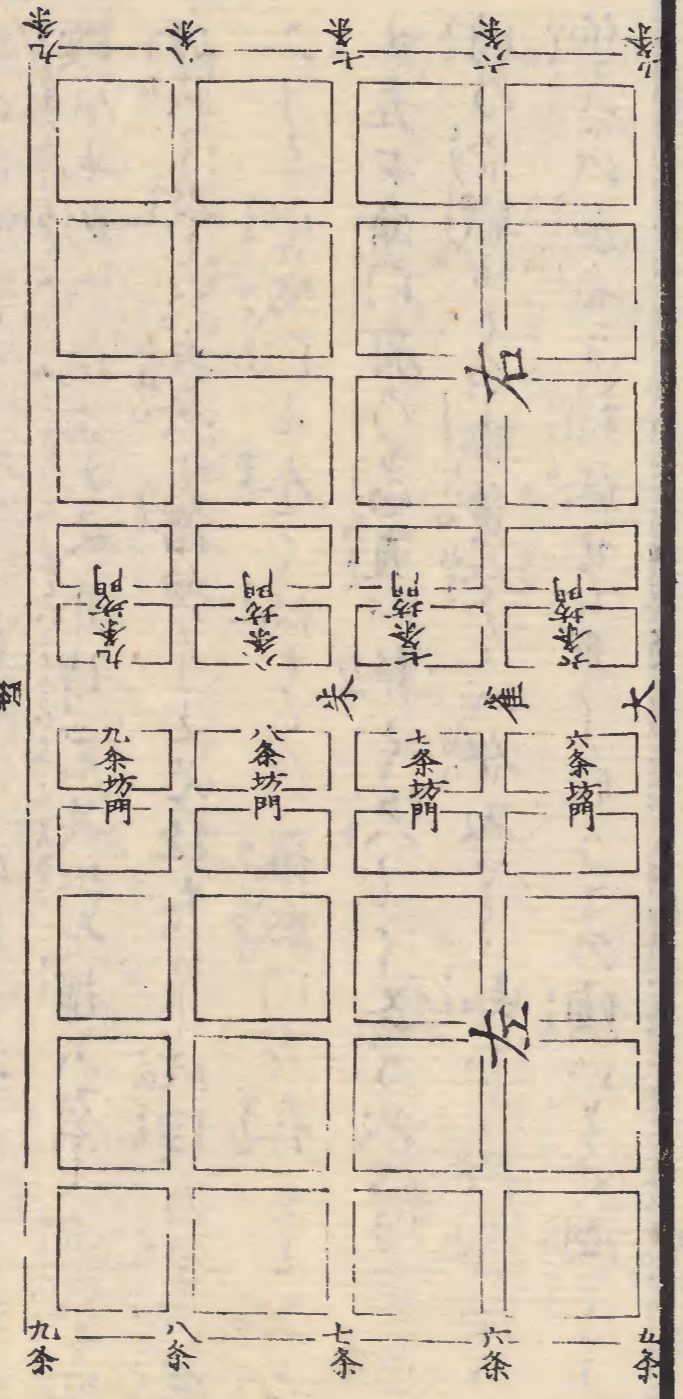
今義解官位令り 衛門督 左右衛士督正五位三階とあり
職負令ハ衛門府ハ諸門禁衛出入乃礼儀時をいひ是檢
志及ハ隼人門藉 人乃名をわきり 門勝 物乃負數を去り 今の還り状あり
と掌るといハ左右衛士府ハ宮掖 西門の傍り小門を禁衛
隊仗を檢校し時をいひ巡檢ハ車駕出入乃前殿後殿乃
ことを掌るといハ左右衛衛府ハ同門を公配るといハ是を
熟考せらる諸門ハ宮門京城門を總て統り同門とハ

左右京圖 左右衛門府當直門圖

東西一千五百八丈 今四十一町五十三間二尺



五ノ七



南北一千七百九十三丈 今四十八町四十一間四尺

羅城門 朱雀門 偉鑿明ハ左右衛門共了守る
 此外ハ朱雀大路を中切ハ左京ハ左衛門右京ハ右衛門
 大邊を守る

内中門を云とあるハ長安永安門等を云と志取
國と合ハ然る時ハ左衛門府乃當直乃之ヲ羅城門 左衛門
坊門 二条 三条 四条 五条 六条 七条 朱雀門 美福門 郁芳
門 待賢門 陽明門 上東門 達智門 偉登門等の
十六門を云と由之ハ職原抄ハ左衛門尉
顯官也仍六位諸大夫并侍尤其仁を擇ム登ノ近代是れ
沙汰了及之ハ無念と禮會一と足程た一ハ頃ハ里内裡
ノ一ノ宮城門由全ク滅らるハ羅城門を存と云と
也左右衛門府乃南直ハ絶く一ノありぬ事ハ當
時乃官職も之ハ職負令一ハ合ぬ一知一伯耆守ハ
伯耆乃國司子補任せらる一好一この頃ハ一國一

國司と守護と二職を置キ國司乃職負令云云如く祠
社祠ハ天神を云ニ 家數ニ人別 簿帳より百姓を字共良一
社社ハ土神を云ニ 戸を云ニ 簿帳より百姓を字共良一
農桑を勸課する事とを掌る好り守護ハ盜賊追捕を
主と云
長年々々長高と名乗せける事長く高きハ危一との勅定
あく今乃名不改々々是年八月七日六波羅乃仲時時益亦
松圓心子種忠顯朝臣等乃たあし攻破らる事東國を
落ゆける殆ど一々時益ハ流矢ハあつて命をおと仲時
ハ自害一々失ける事一船上へまゐり一都へ還幸あ
る事一々仰出させける時長年を云ハ勘解由次官老守
承久乃先程了依々考ふる事一六波羅ハたをさく攻落すと

此と強倉乃安老いさく依定せある間ハ控け公守御逗留
あまへきう一奏同しけさハ之上所自身周易を以て清く筆
を考へき勢らゆりし師乃と六を泊させらゆりか及丈人上
ふく答ふといへる還幸行乃支障りありんとおり定め
らして六月廿二日船とを發せらゆり色ハ長年平劍く風
聲乃清ゆり供よま

還幸乃清通船陽道と見ゆ色ハ船とより米子へ至る
去里より溝口へ三里溝口より二里二部二里板
谷系二里新谷一里之鴨二里言田一里久勢二里壺井二里
津山二里勝間田四里大井二里伏用二里米子
程凡之拾五里才二日月より書寫山へ至る二里山邊今

五ノ九

廿二日船とをを發ありと廿七日書寫山へ臨幸と云
ハ一日凡六里許ゆり乃御行程あり公武令子行程馬日
小七十里歩ハ五十里
車ハ二十里とあり一里ハ今の四町十間あり歩リ七十里ハ今
の八里之町に十間あり五十里ハ今の五里廿八町あり
あく廿八日法華山臨幸と云この道凡七八里了おと
ムハ揚子晦日吾庫へ還幸ありと醫王山藥仏寺不入
加茂郡比の程十町八里了及ハ女
廿後ハ九日乃御旅宿いさく考へハ藥仏寺ハ天年平中
基菩薩乃建云阿弥陀佛ハ聖徳太子乃佛化と云
本堂乃後了舊文有舊有薰殿刻乃觀音堂あり堂の東
小靈泉あり相傳ハ後醍醐天皇崩ハ臨幸ありけり時
御不慮あり海を不依く此の靈泉を汲く御薬を調進了
る小急所平愈ありハ藥仏寺乃号を御入といゆり

伯耆守長年朝臣真蹟 柳菴珍裝

長年朝臣元弘二年閏二月廿九日船上余の父合我乃賞賞之月
左衛門尉了補補伯耆守伯耆守不任不任還幸還幸供奉供奉建武元年春因幡
伯耆乃守護職たる日伯耆守を子息義高義高譲譲りて是系圖不見也

伯耆守
長年朝臣
真蹟

五ノ十

伯耆守
長年朝臣
真蹟

一
 海峽
 一
 國

五ノ十一

文
 海峽
 道標

元弘三年七月 郁芳門の沙汰所乃止郷九条民於々先徑卿寄人の捕正殿
 永和長年たり 如意のまへに詳しうあつたれと申駿河國司より勲功を云上
 せしを沙汰所あつて 紘彈あつて 紫塔を給へり 故に國宣公の文
 あましと給へり
 此書翰の裏に 眞言宗の用標を書きたり
 故に紙乃上下を裁切らるるあり

六月四日兵庫よりすの東寺に入りせり五日二条富小路の
内裏へ供奉乃儀式を刷ハきり終く入所す由一七日冷泉
萬里小路乃内裏へ還幸ありぬかく郁芳門乃左宮乃沙
汰所を置く九條民部卿光經卿を正卿と一又畿七道乃
万機を沙汰せり是官軍勲功乃勳賞了至くハ楠正成と
長年とせ以く奉沙り定めらゆ一ハ長年在國しく國
務を修めとありて人依く子息義高を奉く伯耆守と一
本國より還らしめ長年ハ京都に住き一形り或云西洞院の六条
坊門に住せりと云
今女樂通り西洞院ハ幡丁建武元年中興乃帝業官軍成忠乃
致とあり元より優劣を論とあり違ふと一ハ魚とハ長
年乃船上り迎へし甲一忠切拔群ありと一ハ因幡伯耆乃

守護職とあされ舎弟長重長生等をとも一旗門葉了至と
程く了教業昌と一併ふと他乃身目を驚りたり建武二
年六月西園寺公宗謀叛乃同ありけるふより公宗む一ハ由
長年と中院定平と一仰らゆ一ハ長年定平二子餘騎あり
北ハ乃亭へおしせ公宗以下乃凶徒を追捕し罪乃首従
を乳せ也公宗を乃お雲國へ流しけり人死せたり長年
不服せり長年あをを信置んため定平乃家子乃向ハ
中門乃前あり興り衆んとするハを長年警の髪をを
て引をを腰力を抜く首を挿置と叩く一後子公宗興力の
時約相摸時兼各載等東國へ逃下り旗を奉一ハハ
征伐ありと一ハ是利宰相當氏を東國へ下り

尊氏たかうぢも朝憲あそけんを忽たちまちに感傷かんじやう乃すなはち沙汰さたありけるよふ新田
左中將さちゆうしやう義貞ぎじん朝長あさなが節刀せつたうを切きりて誅罰しゆばつせらるるため東山
へ赴おもむき後のちを長年あさなが正成せいせい二人ふたりを以もつて京都きやうとの守備しゆびするハ
かさねあり後のちも義貞ぎじん朝長あさなが合戦あつせん利りなく尊氏たかうぢ勝かちみのりて上
谷かみと新あらたしう同おなじのけ長年あさながも勢多せた橋はしを固かめり尊氏たかうぢを待まち
まらゆる赤松あかまつ圓心えんしん久下くげ時重ときしげ等ら尊氏たかうぢと與ありて山陰さんいん山陽さんやう
兩道りやうだうより京都きやうとを襲おそふんとせしに上かみり後醍醐ごたいご天皇てんかう山門さんもんへ陰謀いんぼう
ありけり同おなじのけ長年あさなが勢多せたよりまきふ東坂ひがしざか本もとへ馳かまらん上かみの
路みちちりりり安やすらうと道みちとゆ今いまて内裡うちへ歸かへり来きりて後のち
乃すなはち喇らあまふりて三さん百ひゃく餘よ騎きをり具ぐへ具ぐへ引ひかへり
建武けんぶ三年さんねん正月しげつ十日じふにち悪日あくひとて尊氏たかうぢいさへ入いりて治ちせりつは共とも

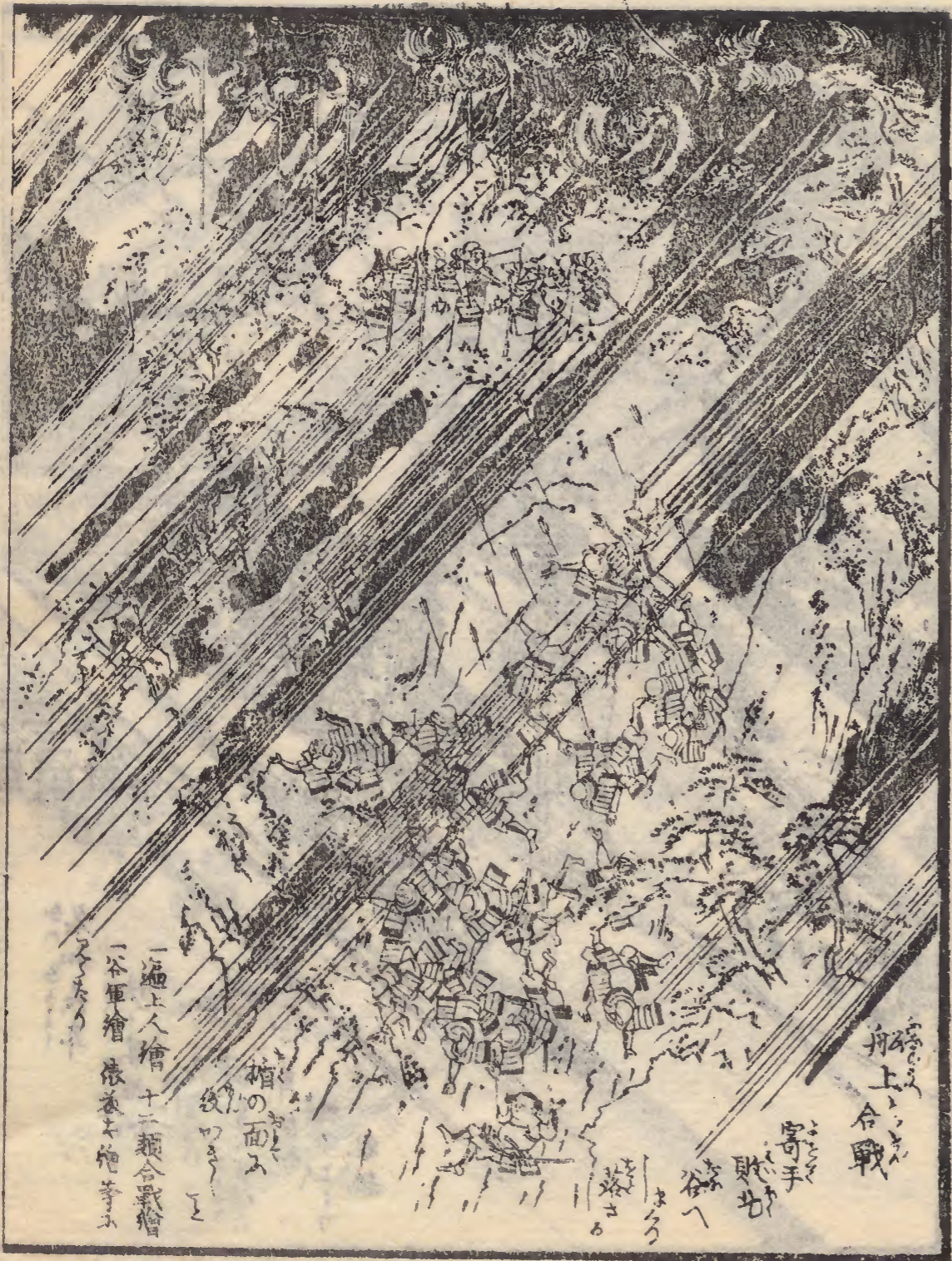
口くち西國さいこく乃すなはち兵數へいすう万騎まんき京白川きやうはくがわに充み満みたるハ既すでに舟ふねに舟ふね乃すなはち
舟ふねを忍しのびてあつりてさふ遮さへり打うちとらんといけりとも長年あさながうち
破やぶりて十七じふしち夜よより戦たたかふと二百にひゃく餘よ騎き乃すなはち勢次せいたい弟たふふ員いん
討うちとつりて内裏うちの置おき石いし乃すなはちさふりて二百にひゃく騎き余あまりふありて子こたり
あつりて馬うまを乗のりて南みなみ廷ていより馳かつりて見みるふたれ甲かぶとし人ひと共とも
知しり入いりて賢けん聖せい乃すなはち歩障ふしやう子こ悲かな相あ平へい乃すなはち垂簾すいせん如ごとく引ひ
ちりて正ただ儀ぎを心こころにきりて家いへ教しゆの子こ乃すなはち宮女みやうによ若わか葉はを
粘ねひて弘ひろ繼つぎ教しゆ乃すなはち合あつりて令しん鉤こうむありて雲うん臺たい乃すなはち畫え圖ず表ひょう
のふ破やぶる長年あさながさふをりて洞ほらを兩眼りやうがんするにハ鎧よろいの袖そでをそ
めりて名なやまをりて休やすみして居ゐるけり敵てき乃すなはち時とき乃すなはち舟ふね同おなじ
く同おなじのけハ陽明門やうめいもん乃すなはち前まへより馬うまより打うちつり北きた白河しろがはを今いま送おくり

東坂本へそ集りけふ可ふ不甲装佐濃乃官軍集引乃國
司孫家乃大軍を起し東坂本へ集らるる也ハ京越へ押
寄く高氏直義を誅伐有へし五月廿七日乃宵より長年
正成結城入る之少孫崎あり西坂を下り下り松本陣をとる
明也ハ長年壽烈の森より今出川急へ押寄り火をうけく
烟乃下り斬り廻りしれと高氏遂に打負く松津屋へ
落りしハ杉本恒元九列へおぼろなる多かしく都下敵
一人もかくれりしハ五月廿還幸ありし也とゆさうゆりしに
大内乃正月十日乃兵火不罹く空しく礎石のそを遺さる不依く
花山院を以て皇居とふされたり
異記平記了長年内裏を遷徙
の秘跡をんを難く放火と云
説を載せし由誤りし誠ハ
細川定禅乃様たるなり

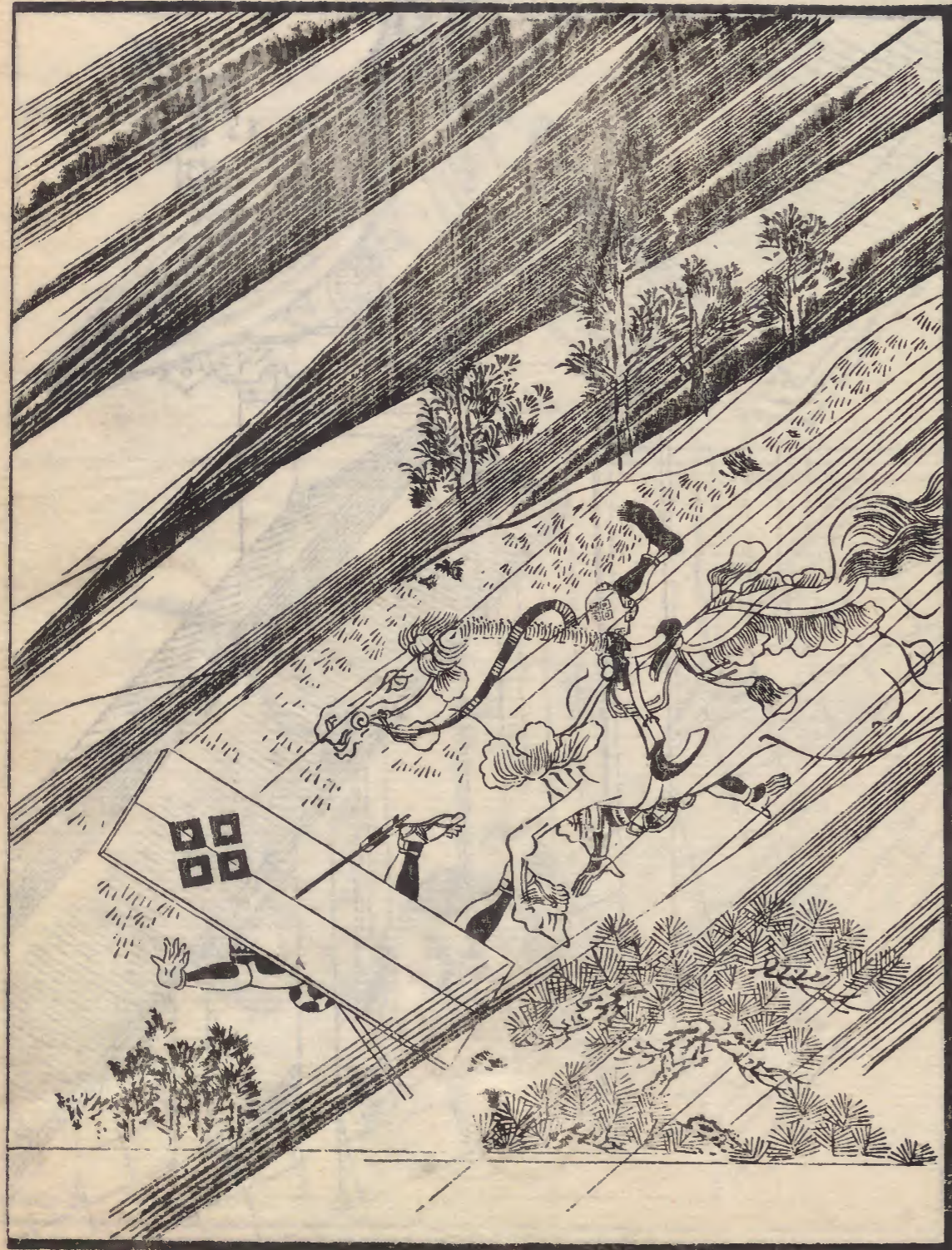
て襲ひ上るす中國乃早馬あり彼を打く告ありしハ
あく討留む庵との宣言ふり義貞羽長ハ中國へ進発し
楠判官正成ハ兵庫へ下向し義貞羽長ハ合世長年ハ
京都不留めらせけるふ義貞朝長軍志むく利を失ふハ正成
湊川あり討死し尊氏とく不畿内より入と関しめさる也廿七
日ありしハ門へ臨幸あり六月七日高氏ハ兵西坂を襲
ふ子種宰相忠顯ありを防ぎ戦ひ破るく打死とおあり
八日高氏ハ兵東坂を襲ふ長年昭屋義助と共におも
白多越る防ぎ追ひてを打ち合戦たひくありく勝負ハ
互に牛角ありけしは同一く晦日義貞朝長高氏乃東寺の
陣へ押寄く箭一ハ射去すくハ歸らしと誓く打たせけ

且ハ長年小園こゝろ一打うち立たて白鳥しらとり乃の茶ちやをを己おのけると見物けんぶつ一
 ける女おんな童こどもこの澳あ天下てんかふ之木このき
楠 結城 伯耆 皆 文字 一 葉 千種
あるを以ておの通へたり
 といわれいる人ひと乃の之人このひとの打うち死し一ひとの伯耆伯耆一人ひとりののろろたるとよ
結城親光ハ五月十一日未久く討死一楠正成ハ五月廿八日
死云けるを 湊川ハ六月七日西坂あり
死云けるを 今と打死せぬとをいハ
 此こああ一人ひとり乃の沙汰さたとれとああそ女おんな童こどもをを小こわわくくハハ云いららめめ今日けふ乃の
 軍い味ち方かたをを討うち負まへへ一人ひとりありともも討うち死しせんと思おもひひて
 猪いのし熊まをを下くだりり小こ神かみ守まもりり追おひひ合あ圖と相あ遠と一ひと義ぎ貞ちん朝あ
 乃の二ふた万まん金ごん法ぽう乃の東とう寺じハハ駈か向むかハハ八はち条じょう九く条じょう小こ一ひと
 たる敵てき十じゅう万まん余よ勢せいとと我われとと之この条じょう河か系けいハハささろろとと引ひ長なが年ねん終は
 了し味ち方かたありともも一ひと隔へきりり止と二ふた石いし條じょう勢せいをを一ひと手て小こああ一ひと大おほ宮みや乃の一ひと条じょう
五ノ五

小こ我われととろろりり乃の木き戸とをを一ひと人ひともも残のこららとと死しくくけけりり長なが年ねん
 今年こゝねにに十じゅう八はち歳さいととかかやや
一説ありハに十七歳と一歳ハ十八
に十八歳 嫡子 伯耆守 義高 次 野基 長 之 男 高 光 を の 一 羽
不傳あり
 京きやう城じやう圖と乃の依よりり考かへへ多たりり一ひと条じょう乃の大おほ宮みやとと云いハハ大おほ内うち乃の東とう
 北きた乃の隅すみ小こ南なん乃の大おほ宮みや大おほ路ろ廣ひろささ十じゅう二に丈じやうとと式しき乃の見み地ち今いま乃の
 町まち長なが少すくくく廿にじゅう間かん乃の路ろ乃の一ひと条じょう乃の大おほ路ろハハ廣ひろささ十じゅう丈じやうとと云い
 今いま乃の十じゅう六ろく間かん乃の路ろ乃の京きやう都と繪え圖と乃の引ひ南なん乃の堀ほり川がわ
 乃の廣ひろ六ろく間かん半はん餘よありとハハ即すなはちちむむりり乃の四し丈じやうととありと教しやくををれれりり西せい
 小こ半はん町まち乃の街まち江え川がわ小こ路ろ江え川がわありと凡およ百ひゃく四し十じゅう三さん間かんをを過すぐぐ大おほ
 宮みや乃の梨なし本ほん町まち乃の西せい小こ乃の今いま町まち屋や乃のありとたたるる

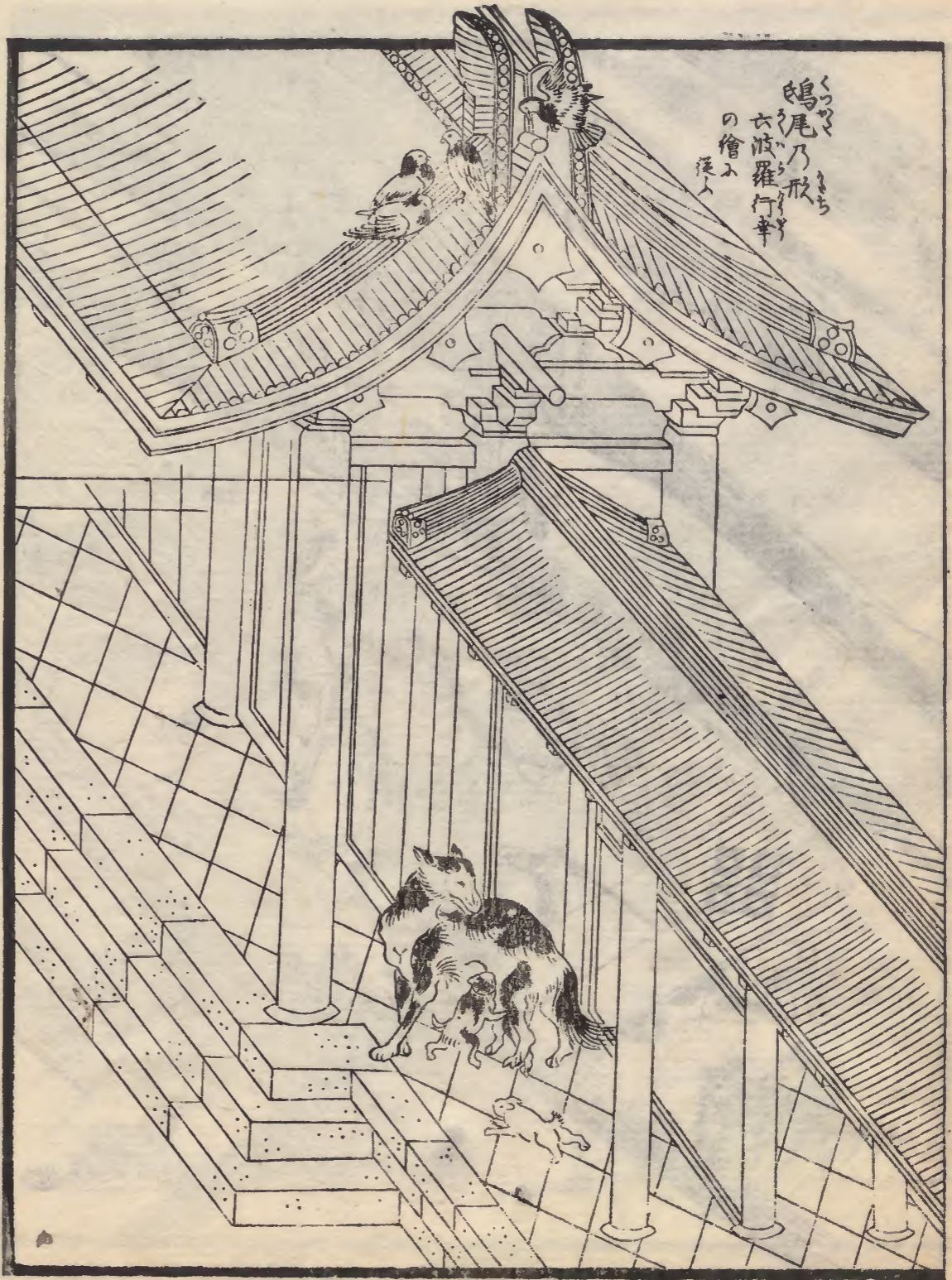


あくく大宮大縣十二丈乃内かるへけまの長年乃戦死し
 公乃地おるへー長年打死し〜天保壬寅了多〜又百七
 年その忠誠義氣お日月とくお光りを増といふと
 其乃身體終焉乃地埋滅し〜知人か〜堂かあ〜
 や余薄遊を甘ん〜東海東山乃道を通ると凡そ八廻
 蕉箱乃句碑を建るものを見〜年く〜お不〜一吟一
 詠おをその子弟を在〜胸懐了蓄ふる〜能く〜
 と貞弼お勒し〜不打ちを〜不追遠乃志あ〜と云
 魚〜其色家を被〜王事お後ひ身を殺し〜私愛を顧
 以境了臨〜時了感せ〜吟詠了以〜何〜但骨壤
 乃差からんや



名和長年
佐々木昌綱

を射る
合さく昌綱の
即ちを
旗の上より
射殺



五ノ十六ノ三

承久元年七月十二日大内守護乃右馬頭源頼茂
政四男源藏人火を放く大内を焼く如くハ仁孝殿了
頼茂乃長男頼茂放火の事ハ後ハく程由なく後鳥羽
入る腹切了乃信ふくハ後ハく程由なく後鳥羽
大内門順徳乃之院畿外ハ遷幸ありハハ火うハ
院心裏を皇居と一々大内々次第ハ荒蕪とせとハ
理乃沙汰了及ハくハ一々を建武元年正月十二日安藝
周防の両国了課と一造を出さと百十六年乃間
廢頽了及ハる宮教了めく延暦の舊觀ハ復せし一
朝の春夢と共了破也あんととと教を見く各和長年乃
純忠義勝ハ了了哀了と思ハくハ樓連了了去不
いさろハ抑人乃良心形了了了細川定禅了了了

火を放く宮闕を燒く何乃為そやむハ楚項羽と
漢乃高祖と共了秦を攻た了了高祖了了咸陽ハ了
秦の宮教樓閣乃廣大か不を觀く民力を竭了了傷
之項羽のち不本了了了を燒く乃心我育とからは
人乃為不有せら了了と嫉むハ了了定禅乃大内を燒
項羽乃咸陽を焚たると其意同了了とい了了定禅乃心
神器を窺了了了あはる不了了乃甚了了罪誅を遁了了
處か一と云了了皇居ハ累代乃皇居なりハハ四海乃
民乃膏血と筋骨とを竭了了了た了了了造乃大内たり
是を焚燬了了了觀了了了了民を憐むの心なりと
云へ了了讀了了の心を潜了了了了了を思へ



大宮 おみや
 大略 おほしり 乃 の
 杉戸 すぎど を を
 長年 ながねん
 計死 けいし
 乃 の 圖 ず

大宮

兼好法師ハ天兒屋根命卅九代後位下右京大夫卜部
宿祿兼各乃長子兼顯の三男形り兄を大僧正慈遍と云
南朝了因侯一神風和記之巻を記せり 櫻雲記の興國元年
次ハ後六位上民部大輔兼雄形り兼好弘安六年壬申乃
歳誕生あり 或云弘安六年幼けあふくオリこ親了事
少ふ志あつく人を慕ひふく風雅乃道ハ彼香山乃跡
を慕ひ和歌乃浦波了心を了覺く頓阿淨辨慶運と名を
齊しくして四天王と稱せらる馬乃雲ふ推乃くく堪能
あつく一ハ寂勝光院乃邊あく馬を馳し男乃落んと人
ををい水かと 徒然草自讚的の向入るり後矢手接ぶす
地中を福き 七箇葉の一 同九 十二段 とく知金一後宇多院乃北面ふ

まき丸兵衛佐了補きり也後位下右京大夫十年後宇
多院讓位あつく伏見院位了即を中御つとと小大
後宇多院乃私洞あく志りけりこ乃時内裏ハ冷泉
万里小照教とく大御門院乃所なり 後嵯峨院不
侍りて終り南代乃内裏あり 今ハ庚川乃北入
柳馬場の五町地増町通りさぬ倉町高倉 仙洞ハ常盤井殿と云
ふく茶町乃茶が一町乃と去る形り 大炊御門京極形り
大炊御門京極形り 今乃寺町通り下御前丁大炊兼好ハ
洞了系了仕了り 今乃寺町通り下御前丁大炊兼好ハ
次渡殿乃方より最妍務か女房乃色珠子 豊りか衣
まき眉類つり美しく髪ゆりくと長く 今乃寺町通り
あまは月とゆる心地と見おくるぬ像ちり人乃同ハ中宮

乃御使^{みかづ}る系^{けい}工^{こう}人^{ひと}了^りあそと云^いその後^{のち}そは休^{やす}乃^{なり}哀^{あは}しむ
はくろく^{はくろく}形^{かたち}相^{あひま}ひ^ひさふことり居^い長^{なが}日^ひたあ^あ降^ふつ
る愛^{あい}人^{ひと}我^{われ}のひふやま^まくへ^へあや^や
降^ふ香^か子^こ通^とち^ちあ^あき^きれ^れう^う乃^{なり}公^{こう}雅^{みや}ふ^ふか^かく^くお^おり^り入^いる
と^とあ^あけ^けき^きわ^わり^りふ^ふく^くや^や露^{つゆ}を^をお^おり^り入^いり^り同^{どう}人^{ひと}あ^あり
婿^{むこ}い^いさ^さふ^ふ其^{その}お^おり^りや^やい^いの^の出^でせ^せい^いる^るふ^ふん^ん伊^い賀^が持^ぢ守^{しゅ}橋^{はし}板^{いた}志^し
乃^{なり}志^しと^とあ^あみ^みく^く中^{ちゆう}宮^{みやう}乃^{なり}小^{せう}辨^{べん}あ^あく^くあ^あそ^そあ^あを^をと^と云^いを^をた^たの^の
お^おち^ちり^りく^く居^いる^るく^く聲^{こゑ}を^をく^くさ^さり^り乃^{なり}契^{ちぎ}あ^あく^くも^も願^{ねが}う^うく^く
同^{どう}く^くさ^さお^おと^とり^りの^の通^とぬ^ぬき^き聖^{せい}乃^{なり}心^{こころ}由^{よし}縁^{ゆかり}へ^へう^うけ^ける^る鶯^{うぐいす}の^の下^{した}を^を
哀^{あは}れ^れと^とい^いひ^ひ夢^{ゆめ}を^をぬ^ぬく^くや^やと^と云^いい^いひ^ひや^やて^て云^いを^を傳^{つた}へ^へる^る
と^と云^いる^るあ^あや^やさ^さく^く打^{うち}出^だん^ん云^い乃^{なり}紫^{むらさ}の^のあ^あい

あ^あく^く勢^{せい}を^をや^や木^き葉^はの^のれ^れ乃^{なり}埋^うき^き水^{みづ}下^{した}あ^あく^くも^もく^く絶^たぬ^ぬん^んを^を
と^とさ^さり^り好^{この}り^りな^なり^りか^かく^く云^い初^{はつ}く^く日^ひ敷^{しき}あ^あそ^そと^とい^いか^かさ^さら^らあ^あ
た^たの^のめ^めく^く人^{ひと}さ^さへ^へか^かい^いり^りく^く
か^かく^くい^いく^くい^いの^のを^をう^うさ^さり^りふ^ふ白^{しろ}高^{たか}き^きお^おき^きふ^ふ過^かき^き月^{つき}日^ひ成^{なる}らん
と^と恨^{うら}み^みか^かあ^あち^ちた^たと^と傳^{つた}へ^へい^いき^きあ^あけ^けせ^せハ^ハ夏^{なつ}乃^{なり}夕^{ゆふ}の^の
飛^とび^びは^はく^くる^るま^まく^く共^{とも}ま^まさ^さぬ^ぬを^を并^{なら}ぶ^ぶり^り形^{かたち}の^の小^{せう}杖^{じやう}と^と風^{かぜ}や^やさ^さらん
お^おり^りの^のを^を晴^はる^るを^を由^{よし}乃^{なり}あ^あけ^けせ^せハ^ハ祈^{いの}を^を共^{とも}共^{とも}共^{とも}ま^まへ^へ交^{まじ}給^{たま}は^はぬ^ぬや^やと
ま^まさ^さか^かな^なり^り共^{とも}乃^{なり}之^{この}室^{むろ}の^の林^{りん}葉^はの^のか^かく^くぬ^ぬを^を色^{いろ}ハ^ハの^のら^らさ^さ成^{なる}り
あ^あく^く敷^{しき}あ^あぬ^ぬを^をい^いと^とほ^ほく^くか^かと^と結^{むす}く^くさ^さん^ん了^りさ^さそ^そ
ま^まさ^さり^り形^{かたち}や^やい^いと^とな^なり^り家^{いへ}乃^{なり}命^{いのち}を^をあ^あん^んよ^よか^か金^{かね}ん^んと^と頼^{たの}む^む計^{けい}ハ
ん^ん乃^{なり}闇^{やみ}を^をい^いぬ^ぬも^もほ^ほら^らさ^さ色^{いろ}ハ

えあましく還るる積くひりける

去乃入山まことかく小道もかふよりぬふあとは人もあましれ
いふくく父持守け款を見出く打ちらたち田舎へまじり
一同了あめ固く守らさるの兼ぬあまを侍同くいれ
かかーつるんおーる海屋しきくちを耕乃を由居もま
まゆく好くく東乃くくへさゆよひくろ旅乃かま孫の宿乃
新より富士乃ひいとちくく見也

都ふくおのい屋ら終しゆ乃根を新の岡よ出くも
見ゆる子

鎌倉は企谷妙本寺乃境内了琴原乃松とりあつその
松乃あるゆくろを軒の岡と云う彼寺乃舊記了

也兼ぬ乃款けまあくよら款一あさ款り後花草子
鎌倉の海ノ鯨魚と云魚ハ彼境了ハさく船をたあくけ
頃ゆくかひをたあくそれハ鎌倉乃年より乃中依り
ハけ魚をの進ら養うり一世まくハちりくしき人乃あへ
出教とまへらさるま頭ハ下部もくまへ切く捨係り
をた好りかと書た也ハ鎌倉り後一この疑ハあき
子やたしけ琴引松乃邊り居たらんおら妙本寺の
二代日朗上人在山中のこあまへ
氏文了載せく日本紀余け事を聞け地乃形勝を向
通澄なくりく見也
了富士乃眺望まことろ言語了絶く兼ぬの前款實景を
賦きりと好り

平貞直朝臣乃家ふく人々秋よきけありて免汝

古郷のあきぬありふ道徳く旅寝のあはる乃浮き

人々か渡おとけりしれより我我金成といふ如く免

そく々り

平貞直之北条遠江守時政乃三男修理大夫時房朝臣の

孫陸奥守宣時朝臣乃三男民部少輔宗泰乃長男なり

時房を尊卑公服了大佛氏の祖と標出と云とらハハ

あらん 大佛建立ハ建長四年小々々時房朝臣の卒を

仁治元年正月廿四日を距一十二年なり或ハ其

代新を建立ありしなり 貞直より右馬助了任一のち

陸奥守とあふそ家 福瀬川乃東小あり今大佛の

切通一と云邊ありしとかやけ時文保元應の際小

南ふへきり旅りの兼好二十八九乃頃小や金澤あくハ

称名寺乃院内了住き由云傳ふ也とら院宇今ハ願

破く其江定りありハ兼好家集了武藏國金澤と云

妙了首任一家のいさうはるはゆるとゆくと月何りき

古今乃浅茅乃庭の露乃よみ床を多葉と宿新月か

とよはけり依り思へハ金澤へ来りしと西夜と岡也

明く色ハ都乃空のそ哀しくありし事おと爰了んち

驚りてくるよ 後日ありん庭を人ハかけ也ハ

此免ぬ也と語新とゆ好き曉乃羞のかるに社をぬ也

ふと云く居るそ年ハさく法皇より市名ありし都子

里ありしけり道基乃使了つきく岡ハ坂志乃女ハ

すは乃つらうとびせうのかき人とありし中をいひ告げ
人ありしといふ尋ねし

おくれわく跡を人法乃勤免あま今ハとも好き名跡あり

ありし者さへかひく塚乃邊の草枕さふ雨もそふる

扱もさう雨も涙ゆふるものをなとかへりこれより色あきらん

院へ集りたるよめゆりふ覺しめされたりけ後々世の政

を門す括りつ聞えさせ移しく暖灘乃大覺寺ふ移らやお

りせん

皇年代畧記了元亨元年十二月九日法皇後宇多の太子

御遷りありし時あるをこれ法皇外記了建治帝元亨元

年四月大覺寺教所造是も密宗を偈言ありし中を

大覺寺舊記ハ法皇御遷り元亨元年十二月九日と云

け等ハ説ふよきハ兼ぬハ十歳乃時よりある

清法也くハ兼ぬハ久系歎と云められけはハ奉ると云

法閑寺乃道我僧正乃許しよりくハキりける

人志也ハ朽とくハ危き云の業を天は定まらぬ教らん

傍正ハ危し

ことりや天つそより吹れ森乃木の葉をすりさせ入らる

道我僧正々日野後業朝長乃曾孫東寺乃執事聖譽律

師乃三男あり東寺乃長者の聖譽勅院と号しハ改

小住と

正中元年六月廿八日後宇多法皇實年二十七歳大覺寺

彼天竺大師の月隱重山が拳弱臂乏とのこ備ひくかた
ひ霧し形り又神堂院乃板を足色は永仁六年とかや
彼久世の二位入部乃大乗經淨供養乃折のりく
孫けるうかと書く

ひくをあたと書く
と書付らたかろ霧う打残やく幽くえ持り止長と
松尾を結ぬうくと閑つ小昔乃琴の祿あせかろ
おあひを動寺う夏の折明るを月を
香の音乃三六えぬ山の甲斐中かろ月折短折の月
小倉乃宮の住まひたる不とり入谷乃海り有明の月
おろろを曝る色乃花を折く佛ふならんと甘と

五ノ世五

月残り雲むとらんあ大難乃花を折く佛ふ供さんと語
らむけを今更おりの出く

むらおりの籬乃花をまかろ手折く今も子ぬりる
延政門院一條中今々時を失かひあなくのあま立りたる
うを信ふけいひおとん

おのいる色のかあさやふ何屋も若を志の入社の涙を
返く

思ふらんむらにいと世乃中ハあまぬふせを乃復原の
世間さてもくあろ中納言資朝々右少弁後基朝長を
鎌倉より使来りくあろ下里ぬそのち耕乃内のうつり
里あせうくも多くおろくあうゆてを

ついでに... 昔の思ふ如く...
正元元年九月廿三日丙午中納言資朝卿義人氏後妻
鎌倉へ下向ありしより皇年代畧記々卿補任等ふん也
大乃頃兼好吉田山崎住しけふあはへ
あふとく頃阿法師乃律へ

よもせし... 孫の...
孫たちへせよゆりしとりのを向乃首尾ふをそきたるなり
頃阿法師乃律へ

よもせし... 孫の...
孫たちへせよゆりしとりのを向乃首尾ふをそきたるなり
頃阿法師乃律へ

後醍醐天皇... 乃歩律へ
後醍醐天皇隠岐より還幸す角一けしハ中納言為教卿
乃歩律へ

代々... 乃歩律へ
代々をゆくおさむ家乃ゆふは志りそ騒く秋の浦浪
いくふとゆく都はすくさりゆく成けしハ本曾乃ふまきし
乃歩律へ

おのひたつ... 乃歩律へ
おのひたつ本曾乃麻衣あさく乃と深く居ふ今世のま
と海く庵引むとひて志りハゆりし

本曾... 乃歩律へ
本曾路名所圖會ふ兼好法師菴室乃跡ハ霧原ハ乃中ハ
猿猴屋敷と稱するあり兼好と猿猴と音便通すと云ふり
山中乃志訓すりしを今ハまき猿屋敷と呼ふと見ゆ余本
曾路を徑細き一ハ夜落合驛表濃信濃了至まき霧

原山を東北乃が二里許ふんが驛長兼好法師の正
を向ふむうハ落合より霧原ふりかへ御坂より法即
大井野乃多終林より出る道これ也と云々同ノ兼好法師の
宅地あり今ハ田圃とありくむあり兼好菴乃字をのん
と云猿猴居處とおありそや名をいふ
去此處ふく麻猪ふと多々終ハ國乃將まるとく庵の
かよりすく戦を追く人あまき具しつへ来子たれり
あゆまき浮世ありつるをいふありのふ所とや
と記さく東の方へ赴き金澤よりそれより鹿島の社
より訪くまへつる法苑とあり
春日の霧みきりつは末後乃道乃とくより出り月

そ終よりまき都野へ赴き西乃海の果を見巡り都野
仁和寺乃色ありハ乃岡と云妙く幸承承よりけり
よ橋を橋く
あまきおく花とありハの岡乃へあまき終くよの春をまき
今本道乃長泉寺ハ兼好塚ありハ城名跡志しり二の岡
乃西の麓ありありを近世岡乃東長泉寺ハ移まると云ハ毒
志をそ乃より引移せし不やと云々其塔を記述ハ古
まきのともん
伊賀守橋成志ハ兼好を乃むけりく田舎の有り昔の
怨りさも今ハ中ノ男へそ語らむとく招きけり
下りあつる彼國乃うち國見ハ乃ふり田井屋と云妙ノ菴

志川らひくそ位しける觀應元年二月三日兼好法師病臥
り一問百一私氣清元小勅ありと藥を個をせしりせける不
兼好法師勅定乃び一けかきな去とかれと生死無常の速
かた一ハ世捨人乃び終る心設る不とく頭をうく量を更
を清元ゆせんさむくく都子還王かくと奏しけり二条院下
良基 志を同下脚旁乃由あく引給おとんと披悉ありと
ハ こそマハ伊賀國下向平海 津名紗乃津相徳ありと海ら
と法ひしとやおあ月十六日約年二十九歳ふしと一四寂
せしと成惠乃津下り都をりける洞院相國ス賢をさめ親
りり方くへ告たりける菴乃心入残是去ハ古事乃法華
經自孝乃老子經源氏物語源慶心ふ乃卷撰阿ら書たる

五ノ四八

すのろ乃卷神代卷二冊及古書拾二つと黒き麻の衣二つ
その外ハ衣乃衾と餉乃器ハの里なりとヤ以その頃石仕命
松丸と云童日を登く致下 良基へ給くヤけるハ正月廿八日
兼好法師のよめを歎
有とたよ入るあれぬが乃不とヤ我ら小迫をいあけの月
内 兼好 院中 老嚴光 后乃宮まぐけをあまれと同食く粘又
十 不 料 足 二 子 足 を 給 け り 遍 照 寺 の 僧 不 仰 せ て 圓 分 寺 へ
葬 せ ざ ば 多 少 田 井 乃 名 墓 を つ ぎ 二 月 廿 八 日 權 大 僧 都
を 贈 り せ ら せ 二 七 日 乃 眞 福 を 修 せ ら せ 一 と ぞ
田原教乃種生傳を主と具他 天保壬寅より翌と一四九十九
識書乃考考一と要ととる
三年了及へ玉

弘禄七年
平安乃繼

北畠准后伊賀國記了兼好東抄事終而又任吉田公或
棲並國蘇伊賀持守攝成忠慕旧友縁招之結卷于伊
賀國見山麓田井尾遂遂從生素懷於伊賀國為寺堂
葬送之事田井尾築基遍昭寺僧修法事之塔然云觀
應元年二月十六日兼好法師と記さ致園太曆と同
け色ハ伊賀國おる回寂ふしとハ正しく説かふ
徒然草古今抄不弘安六年不生色觀應元年二月八日
六十八歳ふしと卒す致形り高野ふみ於西光院
今より位牌ありと云傳ふ
高野山南谷乃内西光院谷
と云あり西光院あり
八日ハ誤なり
同冬考抄不慮ふ乃兼西教寺了兼好乃位牌ありと南

五ノ廿九

予々暮ハ双岳ふあふし形也と今ハ處乃ものゆあり以
と云
此抄乃作者兼好乃惠空和尚ハ長泉寺の暮を
かまハハ記さふしありし西教寺乃坂本の大徳師如
兼院西教寺を多く一冊基ハ真盛上人物説ハ藥師如
と云
同貞徳抄不徹書礼云兼好乃徳大寺家乃諸大夫み
官罷にみ有け色は内裏乃宿直了兼好乃玉体た
拜さしり後宇多院崩御の後遁世去けり
職原抄不罷ハ
ハ藏人可の属
かまふ位侍乃武勇ふ堪る
種生傳ふ内乃宿直より退かんとけり兼好乃戸の登の
方ふあやけかふ香乃趣を相あうに怒り飛下
る人皆恐む逃す人脱不所教へ翔り入あんとけ色ハ

兼好村溪夜乃多うやあふ乃矢をとり射けかりあや
まきびくくあふ今いとうりあふ弦乃音ふ驚くけりあふ
飛びらんとするをまきを由射とせりくく皆人まあ
て是を見け連ハ一川の鴨のやうに思へり思へり思へり
今一川の雁乃あふも色極めあふをりく博士を
りくけあの名を尋ね仰らあふあふく勅答やあ
きうた怪しき多と乃と七ひくもりうあふあふ
ては多二川あふとわたりくうをにき

高武藏守所直塩治高貞乃妻ふをくは艶書を兼好信
呼ふ書きいあ申をあ記了見へたりあ書を福きりもの
本朝歴史を信一生之過錯也可惜焉といひ技業隠

五ノ冊

逸傳ハ物我相忘たるりあふと云里今按り高貞り殺さ
せりあ延元三年乃てあふく兼好五十七歳伊賀國ふ
て國見山乃麓ふ菴を造り新あまはけ事大よ疑へ
兼倉成氏年中の事ふ正月九日初子日る相あるとさハ
見好法師あふく種乃祝云をり根松を三本持く
糸るま見好法師の管領評定年乃亭へ由まり出
るとあふ見好法師あふ根松と寝待と相通りく艶書
をひきりり沙汰きあふくあふ吉田乃兼好あふ
ハあふあふあふ一巻る兼好と云る能書乃道世
初子の見好と見く寝待の見好あふり林乃乃福由草
心珠ある兼好

みゆきゆきゆき

ちひさしきわ

せ

ちひさしきわ

せ

五ノ解一

ららららら

ちひさしきわ

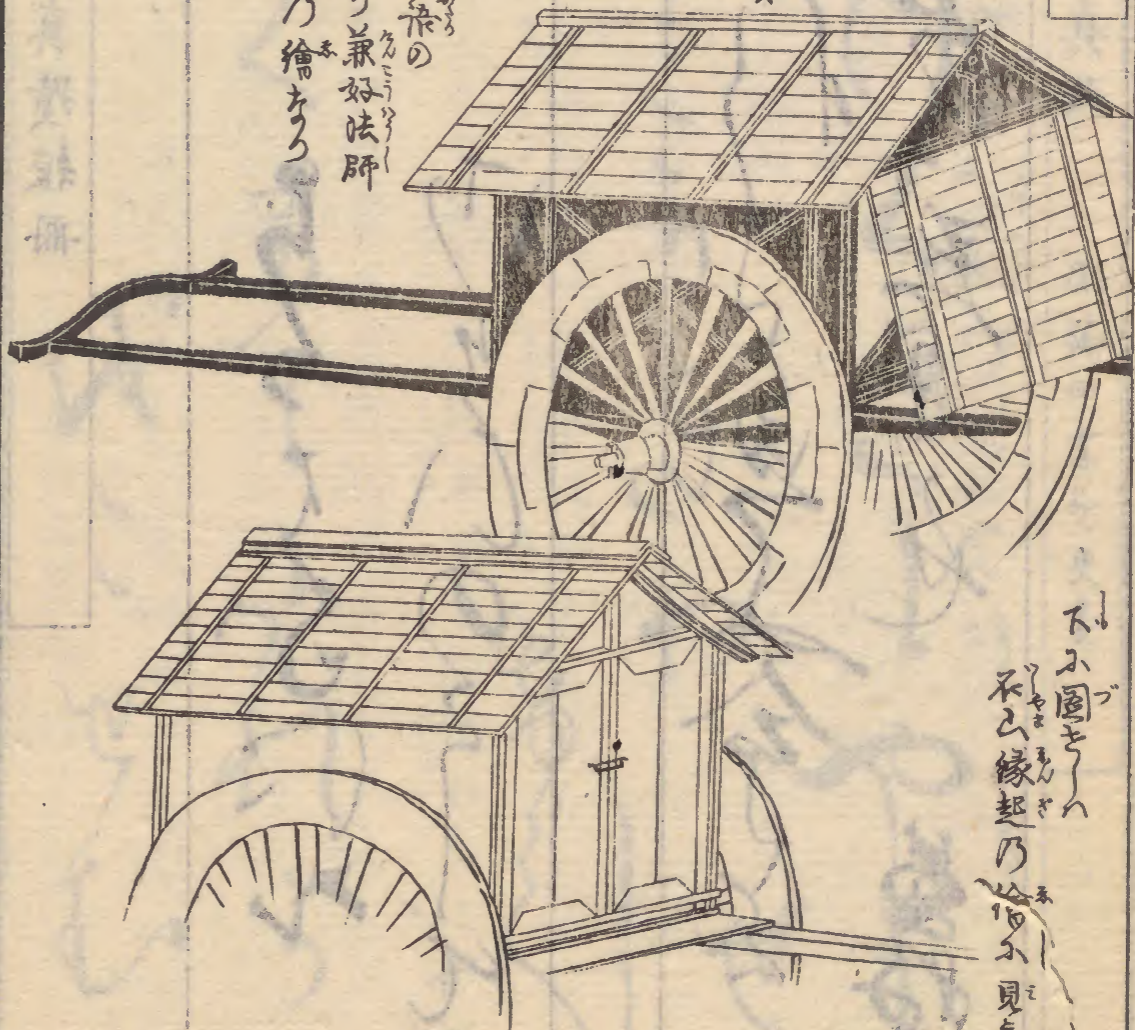
ちひさしきわ

ちひさしきわ

兼好

文車

徒然草七十二段
見くはくつらぬ
ハ文車乃書藝
塚乃ちり



工不固きハ
おろくけ物格の
繪了載る兼好法師
より前より乃繪をり

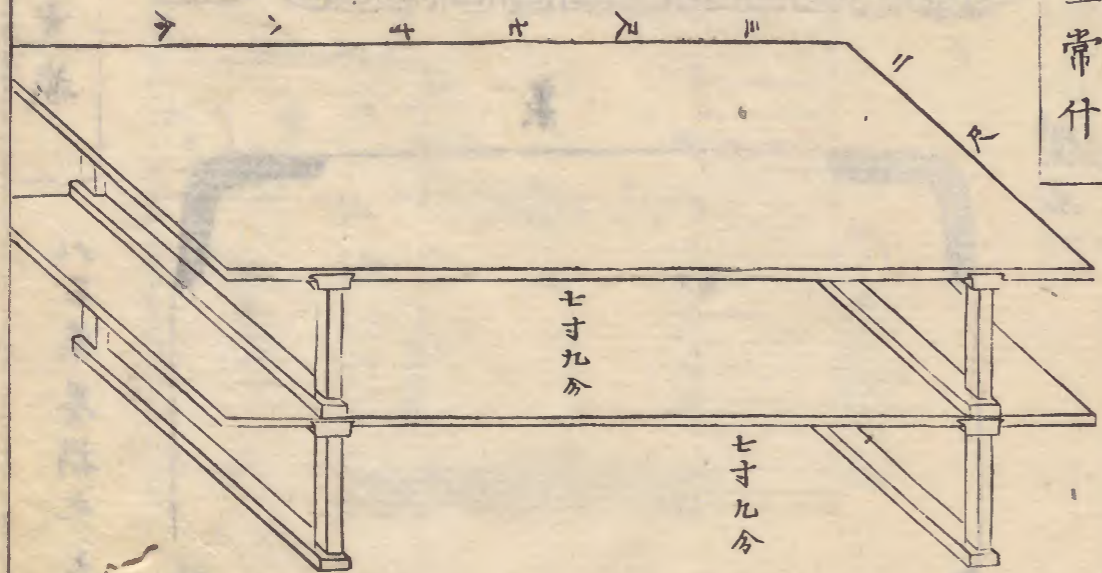
下不固きハ
不不縁起乃繪不見き

五ノ世

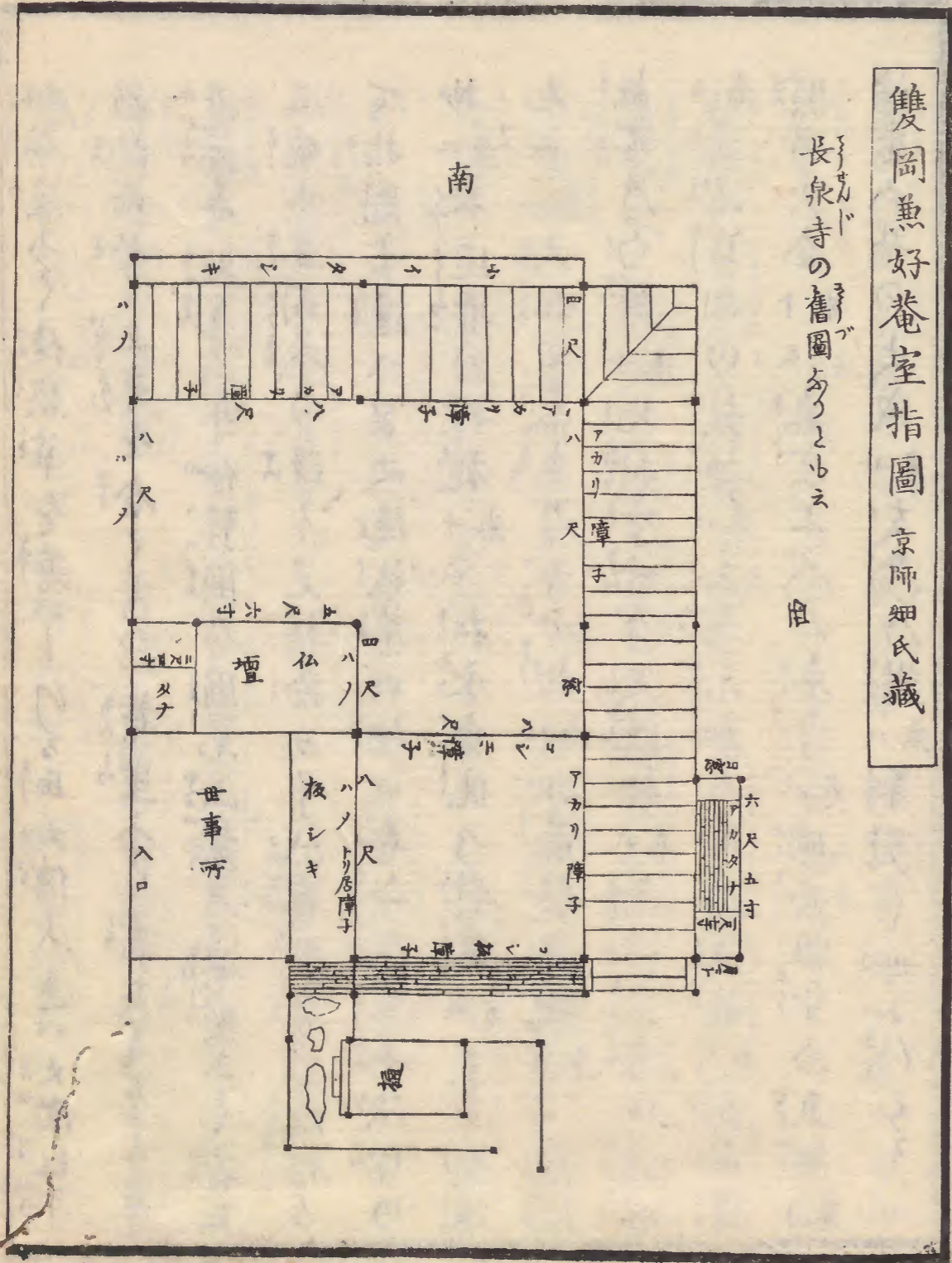
文書棚

兼好菴室常什

山城國葛野郡柹尾
高山寺三尊院脇机と
云物全くハ寸法と同一
件脇机ハ開山明恵上人
用ゆり知と云ハ六百年
前乃典刑と云へり
ハ文書棚檜を以て作る
重ねくハ棚と云へり
校書初了用ゆへり



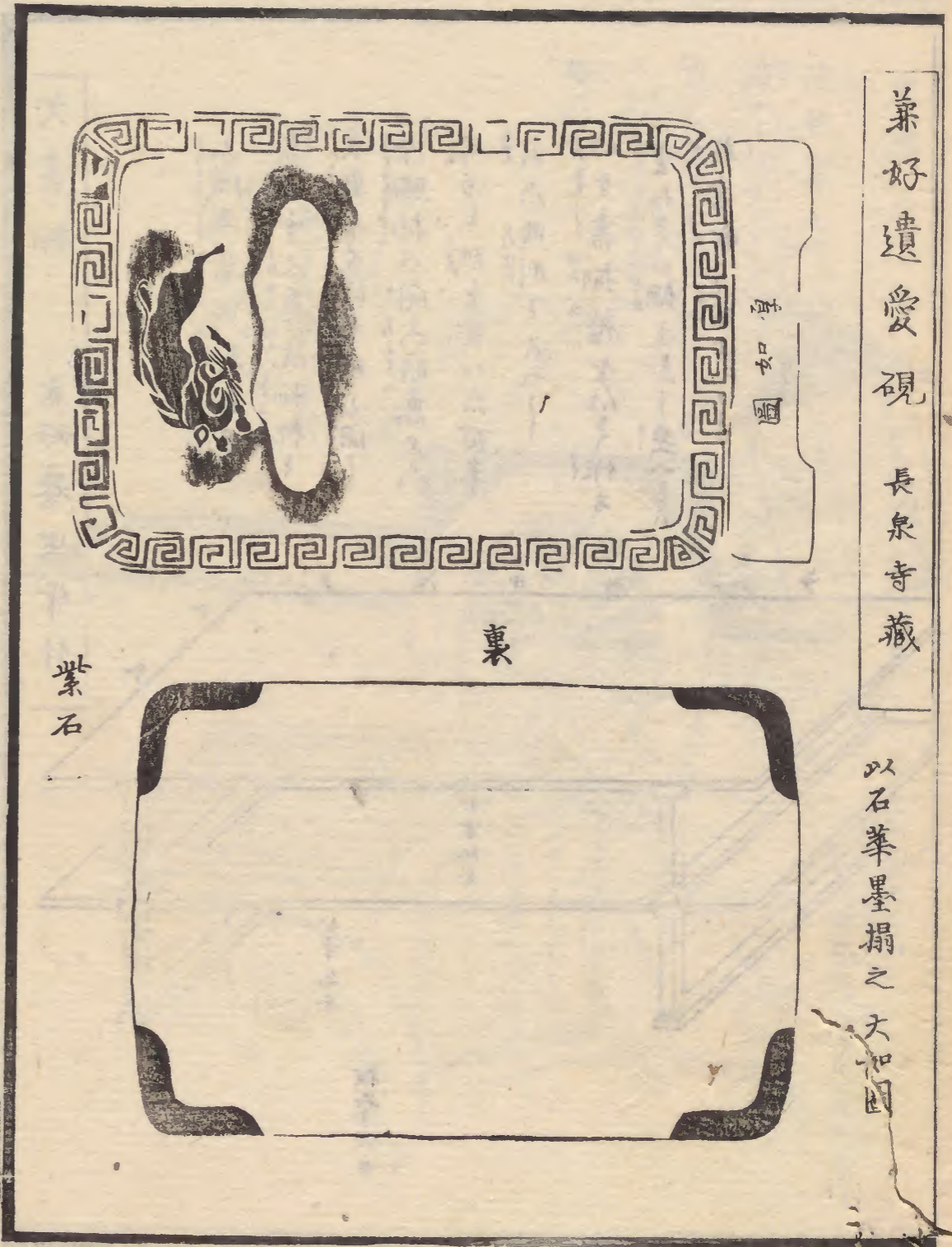
板厚六分



雙岡兼好菴室指圖 京師細氏藏

長泉寺の舊圖ありとも云

旧



兼好遺愛硯 長泉寺藏

硯如圖

以石筆墨搨之大如圖

紫石

此菴室少く徒然草を著ハハハの由云傳人此ハ大肥經平
乃説の如く正卷を全くさハ菴室少く書たるを存
下卷を延元二年伊賀園乃園見ハ禁乃菴室少く書た
る由ハ亦同人乃説了見拈括るるハ菴室今ハ改作
て指圖と違ハ里又徒然草の抄ハ壽命院立安法印の
抄ニ林道春乃野槌 卷十三 松永貞徳乃慰草 卷八
九抄ニ大和回氣求乃古今抄 卷八 水藤盤齋抄 卷十三 高階
揚順乃句解 卷七 北村季吟乃文段抄 卷八 南部宗壽の諷解
卷五 青木宗胡の鉄槌 卷十 山岡元鄰乃増補鉄槌 卷六 高田宗
賢乃大全 卷十三 惠空上人乃参考 卷八 岡西惟中乃直解 卷十
淺香ハ井の大成 卷廿 支考乃讚 卷八 茅多く世ハ抄るる

兼好法師家集の首ハ家集事 秋負事不可定之多少
隨意 或十六首或七百九十首之百餘首と云く也 長
秋連秋等相交贈答勿論也 又非贈答他人秋隨便多
書載之 部立事全不有之 雖有ハ申人不可然尤甘
心者也 卷頭事無部立之者 可任意哀雜等又秋
勿論也 哀傷秋事自卷以才十ハ六番去之忠岑集ハ
以 詞事如日礼物後長書後又秋全判初是此ハ安ハ
心次書其才學事事ハ已正得以意之書之とありくハ
奥書不ハ一冊者兼好法師自撰家集草本ハ彼集不流
布于世也今幸覽く秀秋ハ能去奇觀何夫如く不堪
感悦耶誌之 寛永ハ才三層初秋上旬 長秋負外監通村

判 中院通村云
四十歳の時

兼好法師乃秋了

子槐乃野きの草葉比製樹子身ハあらう乃かき乃さむけさ
とあふを賞しと小椽乃兼好と称し頓阿法師乃

月窟教海田の面よふと鴨の氷よりたけあけこそ乃さ
と云を以て淨田乃頓阿と称し淨無法行乃

凌江乃ありりよまてありの第子父教さやと浦風そふく
と云ふく凌江乃淨無と称し慶運乃

庵結入ふ乃まきくの夕ひさうありかを落るあうのとを記
とらるを以て福地の慶運と称し合さく私秋に天王と云

先進備像玉不雜誌卷第五終

